

ヨハネによる福音書 I 章 I~I8 節 (2)

「^{ことば}言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」

「わたしたちはその栄光を見た」

「阪神大震災で、『モノ』が頼りにならないことが明らかになり、オウム事件では、『心』も怖いことが分かった。何も『よりどころ』にできない厳しい時代。自殺者の激増は、社会全体の悲鳴なんだろうと思う」

戦後五十年間、突っ走ってきたひずみが一気に噴出する日本社会の惨状に「もう覚悟するしかない」と、一種の人生論を上梓した。

生きる「よりどころ」を探して、現代人は、哲学書や人生論を次々と買い求める。プラス思考を説く『脳内革命』などがミリオンセラーになった。「しかし、安易なプラス思考で解決できないくらい深刻な問題はいくらでもある。ここは覚悟を決めて、究極のマイナス思考から始めるしかない」

(『大河の一滴』出版記念インタビュー記事より)



芥川 龍之介

あくたがわ・りゅうのすけ

1892~1927年

大正文学を代表する小説家。

五木 寛之

いつき・ひろゆき

1932年~

小説家、随筆家。

近年は、人生論や仏教思想に関する著作が多い。



こら……。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちはいったい誰に尋いて、のぼって来た。おりろ。おりろ。——こうして 結局、叫んだカンダタの手元で糸がプツリと切れ、皆、闇の底へと真っ逆さまに落ちていった。(「蜘蛛の糸」より)

たいけん
大賢は愚なるがごとし。

ウィリアム・バークレー
1907～1978年
イギリス・スコットランドの
新約聖書学者。
The Daily Study Bible (邦訳
『バークレー 聖書註解シリー
ズ』) で有名。

イエスは彼らが考えるような意味で、栄光を受けると
いわれたのではない。彼らが栄光を受けるという言葉に
よって意味したのは、征服された地上の諸王国が勝利者
の足下にひれ伏すことであった。だが、イエスは栄光を
受けるという言葉によって、十字架につけられることを
意味していたのだ。



神の愚かさがこの世の知恵を砕いた。

ゲルハルト・フォン・ラート (1901～1971年)
ドイツを代表する旧約聖書学者、神学者。

私が子どもであったとき・・・バーゼル宣教協
会・・・が作った絵を見たことがあります。立派な人が
鏡に見入っている。しかし、鏡の中から彼を見詰めてい
るのはとんでもない無頼漢である。そんな絵です。これ
は律法の鏡です。福音の鏡においては、無頼漢が鏡に見
入り、そこに立派な紳士を、豊かに与えられている男を
見るのです。

ルードルフ・ボーレン
1920～2010年
スイス生まれの実践神学者。
スイス、ドイツで、牧会と神
学教育に携わる。
とりわけ、説教学の優れた学
者、実践者として知られる。

この世の中心は愛で、玉ねぎ〔イエス〕は長い歴史のなかで それだけをぼくたち人間に示したのだと思っています。現代の世界のなかで、最も欠如しているのは愛であり、誰もが信じないのが愛であり、せせら笑われているのが愛であるから、このぼく〔大津〕ぐらいはせめて 玉ねぎのあとを愚直について行きたいのです。

遠藤 周作

えんどう・しゅうさく

1923～1996年

カトリックの信徒、作家。

キリスト教関係の小説、随筆も多い。

その愛のために具体的に生き苦しみ、愛を見せてくれた玉ねぎの一生への信頼。それは時間がたつにつれ、ぼくのなかで強まっていくような気がします。

.....

この背にどれだけの人間が、どれだけの人間の^{かな}哀しみが、おぶさってガンジス河に運ばれたろう。大津はよごれた布で汗を拭き、息を整えた。その人間たちがどんな過去を持っているか、行きずりの縁しかない大津は知らない。知っているのは、彼等がいずれもこの国ではアウト・カーストで、見捨てられた層の人間たちだ、ということだけだ。

陽がどのくらいのぼったかは首や背にあたる陽光の加減でよくわかる。

(あなたは)と大津は祈った。(背に十字架を負い 死の丘をのぼった。その^{まね}真似を今、やっています) 火葬場のあるマニカルニカ・ガートでは既にひとすじの煙がたちのぼっている。(あなたは、背に人々の哀しみを背負い、死の丘までのぼった。その真似を今やっています)

(『深い河』より)



一年で一番暗い時、

町で一番みすぼらしい場所。

冷えきって、不安さえ漂う。

ふたりのほか、誰もいない。

そんな現実には、何を期待できるというのか？

学びきれないほどの光を、

蓄えきれないほどの豊かさを、

受け止めきれないほどの愛を、

計りきれないほどの平安を期待しよう。

ひとりの子どもが生まれたのだ。

クリストファー・フライ

1907～2005年

イギリスの劇作家、詩人。

^{ことば}言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。(14)

モーセは一つの天幕を取って、宿営の外の、宿営から遠く離れた所に張り、それを臨在の幕屋と名付けた。主に伺いを立てる者はだれでも、宿営の外にある臨在の幕屋に行くのであった。(出エジプト記 33 章 7 節)

雲は臨在の幕屋を覆い、主の栄光が幕屋に満ちた。モーセは臨在の幕屋に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。(同 40 章 34～35 節)



イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」(ヨハネによる福音書 12 章 23～24 節)

友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。(同 15 章 13 節)

律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。(17)

わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。(16)

貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている。(コリント人への第二の手紙 ^{びと}6 章 10 節。口語訳)